

人間とは何か

玉城康四郎

1

近代から現代へ進んできた人類文明の今日の事態のなかで、人間とは何か、という問い直しの背景には、つぎのような諸問題がかかわっていると考えられる。

一つには、第二次大戦以後、しばらくの間はいわゆる *Pax Russo-Americana* が続いていたが、やがて反体制の動きが出てきた。すなわち、ヴェトナム戦争がおこり、文化大革命によって中国大陸がゆらぎ、アフリカやアメリカにおいてブラックパワーの勃発が相つき、世界各地においてステューデントパワーが爆発し、イスラエル・アラブの闘争は各民族の連鎖意識をかき立て、石油産出国とその消費国とが対立するなど、社会体制の変革を呼びおこすとき諸問題は、従来の西欧文明の基本理念がため

されているといふことができる。

二つには、科学技術の発達は人間の文化的生活を促進すると共に、そのためのさまざまな歪みをもたらすにいたった。その最大の被害は、実質的には公害問題であり、組織的には管理社会の体制と共に人間性を科学技術のなかに埋めこむ結果にまでいたっている。同時にまた、科学のための科学と称して、生体実験もあり、臓器移植もあり、生命の人工生産もあり、科学研究が人間にとって無気味な存在になってきた。

三つには、人口・食糧・資源などの問題である。これはたんなる未来のことではなく、今日の問題であり、きわめて緊迫した状況に迫られている。世界の人口は現在三十七億といわれ、二割の増加率で進めば、今世紀末には七十億に達すると想定される。これは当然ながら食糧問題にかかわってくる。現在でもインドや西

アフリカは飢餓状態にあり、ソ連も中国も食糧は不足しており、世界人口の約五〇%が飢餓状態に近いといわれている。また資源問題では、今日、石油産出国と消費国とが対立談合しているが、石油資源は、早ければ二、三十年、おそくとも六、七十年後には完全になくなってしまおうといわれ、そうすると食糧生産もできなくなってしまう。その外、鉄・銅などの重要鉱物も、寿命の長いものでも七十年が限度であるという。

以上のように、現代の人類に荷負されている特有な諸問題のなかで、「人間とは何か」という問いかけは、どのような性格を有しているのであるうか。この問いかけの方向を暗示する点で、近代から現代への時代の転回を象徴する代表的な人物のいくつかの事例を挙げる事ができると思う。

その一人はカール・マルクスである。周知のようにかれは、被圧迫階級のプロレタリアートを解放することがすなわち人間解放であることを主張し、世界の下部構造である生産関係の科学的分析に裏づけられて、社会革命の実践運動を推進した人である。この場合の人間の自覚は、労資階級の対立という具体的な社会環境のなかにおける社会的人間としての自覚であり、革命という主体の実践を通して社会の変革を目指すことである。そのことが、究極的には人間解放につながるものとなるのである。

つぎの代表者はジグムント・フロイトである。フロイトの前にも何人かの先覚者を数えることができるが、ともかくかれは、こ

れまで気づかれなかった人間精神の重層的な奥に病根のあることを突きとめ、それを直すことによって精神の歪みを回復しようとするものである。フロイトの学説には賛否両論がうずまきながら、ユング、アドラー、フロム、フランクフル、その他今日、無数の人々が活動しており、精神分析は、現代の人間における精神問題の一つの潮流をなしている。ここでもまた、自らの精神分析を試みながらこの問題の領域を解明することが特徴的である。

つぎの人物はアルバート・アインシュタインである。かれは科学の世界の劃期的な変革者であることはいうまでもない。その業績は、原子・分子の微小世界から、星や星雲を包む宇宙の構造にまで及んでいる。ニュートンの力学やマックスウェル・ファラデーの電磁気学を批判的に統一したかれの相対性理論では、観察者自身が観察の対象との相関性にあることが基本条件になっている。

以上ここに挙げた、現代への転換を象徴する代表的な諸人物の立場に共通するものは何であるうか。それは、観察者がたんに客観的に世界を眺めているのではなく、観察者自身が世界のなかにあるという自覚にもとづいて世界を見ていることである。こうした基本的な特徴のなかで、自己を観察し世界を観察し、自己を変革し世界を変革することができるのである。しかも、先に挙げたごとき現代の人類に荷負されている諸問題に対して、アインシュタインが多少かかわったのみで、あとの二人は無関係のままてこ

の世を去った。これらの先覚者たちがもはや夢想だにもすることのできない新たな諸問題が今日おこっているのであって、かれらの打ち出した公式のみでは、現代の問題の解決は困難である。しかしながら、こうした代表者たちに共通する現代の特徴のなかで、「人間とは何か」という課題を問い直すすれば、たんに人間が世界を問い、人間が人間を問うのではなく、人間自体が世界の中にあるという基本条件のなかで、初めて人間は世界から問われつつ、逆に人間は世界を問いかえし、そうした相乗作用のなかで人間が人間自体を問いつづけていくことが可能であると考えられる。

2

こうした問題意識の特徴のなかで、主として仏教の視点から——しかしながらけつして仏教に固執して発言するのではない。そうした態度は仏教の本来のすがたではない。——人間論の問題を考えてみたいと思う。

第一に、原水爆や公害問題、その他人口・食糧・資源などの諸問題のなかで、人間はいかにして生きのびていくかということが問われている。これは人間にとって当然の問題設定であるが、しかしながら世界全体の在り方に眼を転ずるときに、永久生存ということは不可能である。古代ギリシアにおいても万物流転を唱えた哲人があつたように、仏教でも諸行無常が基本的な立場であり、

いかなるものも永久に存続するということは認められない。人類もまた同様であり、すでに人類が始まりがあつた以上、やがてはその終りがあることは必定である。このことは、もとより個体にとつても同じである。この我はやがて死滅する。しかしながら、我も人類も、そして世界そのものもまったく滅び去って空無になるのであろうか。たしかに空無になるのではあるが、絶無ではなくて、見えざる形の無表業として残存し、やがて次の世界が始まるのである。我もまた死滅して絶無になるのではなく、この世の想像を越えた形において存続すると見るのである。

第二に、今日生態学の視点からの問題が論ぜられている。すべての生命は、数十億年の時間を経て互いに生かし合い生かされ合いながら、自然の生態系を形成してきたのである。人類もまたもとより例外ではない。そうした自然の生態系のなかで初めて存続が可能である。しかるに人類は今日、人工的にその体系を崩そうとしている。一例を挙げると、海水のなかに多量の汚水・洗剤・人工飼料が混入するようになったため、海水のなかの循環過程が過重負担となり、汚水や洗剤を分解するバクテリアはいっそう多くの酸素を消費し、ついには酸素欠乏のためにバクテリアも死に、循環作用は停止する。いいかえれば、生態系はたんなる廃物の累積と化するのである。したがってわれわれは、このような生態系の基礎構造を尊重するということが必要である。

今日の生態学の主張する基本的な考え方は、原始仏教以来、立

論してきた仏教の縁起観とまったく同質であるといつてよい。縁起観はたんに原理的な様態を論じているにすぎないが、あらゆる生命、あらゆる事象は、ことごとく互いにかかり合い、もつつき合つて存続していることを主張する。それは生命だけではなく、事物・事象にまで及び、いかなる物も、いかなる事柄も例外ではない。それは原理的には生態学よりもさらに徹底した相關性の世界観であるということができよう。人間論はこうした世界観のなかで問われねばならない。

第三に、そうした縁起観に立つとき、人間存在の意味は、万象縁起の一環を荷っているにすぎないということが明白であろう。したがつて、人間が生態系の組織を破壊することが延いては自己の生命を否定することになると同様に、人間は縁起の一環に外ならないという自覚に徹底することが重要である。この点から、今日の新しい時代における人間倫理の、少くとも根源の一つは明らかになるであろう。すなわち、生態系もしくは縁起という宇宙の理法に従うことが善であり、その理法にさからうことが悪であるということである。

第四に、同じように右の生態系もしくは縁起観から、いかなる生命も他の生命の犠牲なしに自らを存続することは不可能であることが知られる。しかも人間は、あらゆる生命のなかで、他の生命を犠牲にするこの最大のものであることは明らかである。他の犠牲なしに自らの存続のあり得ないことがいかに事実であると

しても、そのこと自体が正当化されるわけではない。事實は、他を殺すことよつて自らを生かしているということである。

仏教では、業報ということがゆるぎのない理法として立てられている。業報とは、いかなる行為もその行為に対応するような結果を將來するということである。人類が他の生命を犠牲にするこの最大のものであるとすれば、そのような行為の結果が人類に報われてくることは必然であろう。これは防ぎようのない理法である。生命はいかなるものも同等の尊厳性を有するものであるとすれば、人類は、自らの生命の存続にただ慎しむをもって受け入れる外はないであろう。

第五に、生命の存続それ自体が他の生命の犠牲という矛盾に在る、という問題について、仏教は、生物学的にでもなく社会科学理的にでもなく、率直に人生論的に、人生そのものは苦であるとするのである。そしてこの事實を主体性の方へ還元してみると、生命の存続自体が我執に外ならないと主張するのである。しかも先に論じたように、生命の存続はすべての生命にかかり、互いに生かし合い生かされ合っているのであるから、我執という生命の根源態は宇宙そのものの成り立ちにまでつながってくる。個体の生命だけではなく宇宙そのものが我執であるという。

このことは、第一に挙げた諸行無常という世界の表相と表裏の關係をなしていると見ることができよう。すなわち、生命の存続は我執であり、さらに拡大されて宇宙そのものが我執であるという

ことは、もはや一切はただむなし、いという外はない。また、諸行は無常であるということも、ただむなしに尽きる。つまり、一切はただむなし、いということを中心として、一方では諸行無常となり、他方では根源の我執から一切は苦惱に終るということになる。これが我を包む世界の真相である。したがって、我は世界と共にこのまま進めば、いかなる我も虚無の深淵に落ちざるを得ない。この深淵から根源的に脱出し、一切のむなしから解放されたのがゴータマ・ブツダであり、生きとし生けるものは、ついにはかかる世界を目指すとなすのである。それは、不変であり不死であり、いわば永遠の生命の世界であるといふことができる。

したがって「人間とは何か」ということの、まず第一の大前提は、流転変移の幻のごとき現実世界のなかにあつて、永遠不死の生命の見開きを実現することである。そこにあつて初めて、流転変移の世界の、相依り相補っていく縁起の意義が考察されてくるであらう。

(たまき・こうしろう、仏教学、東北大学教授)